

3. 双胎妊娠における妊娠期の母子相互作用の事例検討

高知県立宿毛病院 尾 崎 暢 希 (3 8 回生)
高知女子大学 岸 田 佐 智 (2 5 回生)

I はじめに

母子関係は人間関係の中でも最初のものであり、この母子関係を良好に形成するためには、母子相互作用が重要であると言われている。この母子相互作用は、妊娠期からすでに始まっており、出生後の母子関係に影響を与えていると重要視されてきている。しかし、妊娠期に切迫流早産などの異常で入院している妊婦に対して、身体的なケアや安静に対する援助などが中心となり、胎児との関係性に目を向けた看護はおろそかになりがちである。そして、長期にわたり入院している妊婦が、どの様に胎児との相互作用を行い、胎児との関係を作っているかという視点での観察、アセスメントは十分にできていないと思われる。今回、双胎妊娠のため、妊娠中期から入院を余儀なくされた事例にあたった。長期に渡る入院生活を送っていることで、家庭で生活をしているときとは、行われる相互作用が変化したり、双胎であるために、胎児に対する思いや、2人の胎児との関係によって、単胎妊婦と比べると相互作用の内容に異なる点がでてくるのではないかと感じた。そこで、入院生活をしていること、双胎であること、妊娠期にどのような母子相互作用が行われているか事例検討をしたので報告する。

II 研究目標

1. 双胎妊婦において妊娠期にどのような母子相互作用が行われているかを明らかにする。
 - (1) 家庭と入院中での母子相互作用の違いを比較検討する。
 - (2) 単胎と双胎での母子相互作用の違いを比較検討する。

III 概念枠組み

今回は江藤らの妊娠期の母子相互作用モデルを用いた。¹⁻⁴⁾ 母親側のシグナル・反応行動は、行動は、行動の発生が促進される条件や行動を起こすきっかけとなる前状況のもとで、母親は様々な行動をとり、胎児になんらかのサインを伝えている。また胎児側の行動は、胎児の行動を母親が受け取りやすくなる条件や、胎児が必然的に行動を起こしていると母親がとらえている前状況があり、これらのもとで胎児は行動を起こし、母親は状況に応じて意味を付与している。

IV 方 法

平成6年5月31日に、ケースの分娩後約1カ月に、半構成的なインタビューガイドを用いて面接を行った。その質問内容は、江藤らの作成した母子相互作用に関するインタビューガイドを基に、¹⁻⁴⁾ 双胎に関する内容をつけ加えて修正した。面接で得られた内容を概念モデルを用いて比較検討した。

V ケース紹介

ケースは、25歳の時に結婚し現在29歳で、夫、4歳の長女、1歳の長男の4人暮らしである。ケースは子どもは3人くらい欲しいと希望しており、今回は3回目の妊娠である。第1子は平成2年2月に胎児仮死のため帝王切開にて女児3624gを分娩し、第2子は平成4年7月帝王切開にて男児3130gを分娩している。

妊娠11週の時に初めて病院を受診し、15週で双胎と指摘されている。妊娠27週より早産を予防するため入院し、その期間はトイレ、洗面、配膳の時のみ歩行が可能で、それ以外はベッド上で安静を強いられている。母体の合併症、胎児の異常は認められていない。妊娠36週で帝王切開にて第1児男児2396g、第2児男児2152gを分娩している。

VI 結 果

1. 家庭と入院中の母子相互作用の比較

- (1) 母親のシグナル・反応行動を引き起こしやすい条件：このケースでは「誰もいない時に（話し掛ける）」と述べている。これは条件の中の“周囲に誰もいないこと”にあたる。家庭にいる場合では、周囲に誰もいないという状況は作られやすいが、病院に入院しているとこのような状況は作り出されにくい。

表1 母親のシグナル・反応行動を引き起こしやすい条件

	家庭	病院
周囲に誰もいないこと	＊	＊
時間的に余裕があること		
心身がリラックスしていること		

- (2) 母親のシグナル・反応行動の起こる前状況：家庭にいたときには「朝起きたらおはようと話し掛ける」という表現があった。これは“日常生活場面の変わり目”という前状況であるが、入院中には、このような日常生活場面の変わり目での母親のシグナル・反応行動は見られなかった。

表2 母親のシグナル・反応行動の起こる前状況

	家庭	病院
身体的・精神的に不安なとき		
母親が胎児に悪いと判断したとき		
日常生活場面の変わり目	＊	
胎児への関心が高まったとき		

- (3) 母親のシグナル・反応行動の種類：家庭での母親の行動の種類は“言葉に出して言う”“お腹をなでる”“音楽を聴かせる”の3つであり、どれも言語や動作という表現を使って、胎児に直接的に働きかける〔直接的なシグナル・反応行動〕である。一方、入院中は“心の中で話し掛ける”“お腹をなでる”という〔直接的なシグナル・反応行動〕の他に、「お腹が張るとじーっとする」というような“安静・休息をとる”という行動もでている。

表3 母親のシグナル・反応行動の種類

大カテゴリー	小カテゴリー	家庭	病院
直接的な シグナル・反応行動	言葉に出して言う	＊	
	心の中で話し掛ける		＊
	お腹にさわる	＊	＊
	音楽を聴かせる	＊	
	本を読んで聞かせる		
間接的な シグナル・反応行動	安静・休息をとる		＊
	危険なことをしない		
	危険なことからお腹を守る		
	食事に気をつける		
	呼吸をする		

- (4) 母親のシグナル・反応行動の伝達内容：家庭での伝達内容は、“家族を紹介する”“共有する”という関係を作るものと、“願望する”“励ます”という求めるものがある。一方、入院中の伝達内容は、関係を作るという項目が全くなかったが、“要求する”や“案じる”というものがある。

表4 母親のシグナル・反応行動の伝達内容

大カテゴリー	小カテゴリー	家庭	病院
関係を作る	挨拶する		
	自己紹介する		
	呼び掛ける		
	家族を紹介する	＊	
	相談する		
	共有する	＊	
	父親を悪く言う		
求 め る	要求する		＊
	願望する	＊	＊
	励ます	＊	＊
	訴える		
いたわる	案じる		＊
	慰める		
	謝る		
	要求を叶える		
説 明 す る	説明する		
返 答 す る	返答する		

- (5) 胎児のシグナル・反応行動を母親が知覚しやすい条件：ケースは「家にいるときには、落ちついて（胎動を）感じたことがないからかもしれないが、病院では一人でじーっとして落ちついて（2人が）どっちにいるか分かった」と述べている。このことから、家では忙しくて心身がリラックスすることもなく、また時間的にも余裕がないため胎児からの行動を知覚しやすい条件がなかったが、病院では家事に追われることもなく、“時間的に余裕があること”や“心身がリラックスしていること”という条件がつくられている。

表5 胎児のシグナル・反応行動を母親が知覚しやすい条件

	家庭	病院
直接お腹を見ること		
心身がリラックスしていること		
時間的に余裕があること		＊

- (6) 胎児のシグナル・反応行動の起こる前状況：このケースでは家庭でも、入院中でも見られない。

表6 胎児のシグナル・反応行動の起こる前状況

	家庭	病院
胎児が負担であるとき		
母親が動いているとき		
母親に身体的負担があるとき		
母親が精神的に安定しているとき		
母親が空腹なとき		
母親がお風呂に入っているとき		

- (7) 胎児のシグナル・反応行動の種類：家での行動の種類は“胎動”“腹部の増大”であり、入院中はそれに加えて“腹部の緊張”がある。

表7 胎児のシグナル・反応行動の種類

大カテゴリー	小カテゴリー	家庭	病院
即時的な シグナル・反応行動	胎動	＊	＊
	腹部の緊張		＊
	出血		
	空腹		
	つわり		
	ME機器	＊	＊
長期的な シグナル・反応行動	腹部の増大	＊	＊
	体重の増加		
	つわり		
	胸の緊張		
	切迫流産の徴候		
	ME機器		＊

- (8) 胎児のシグナル・反応行動に対する母親の意味付与：家庭にいるときには、健診時に超音波の画面を見たときに「2人いる」という“存在”の意味付与をしている。また新たに入院中は“健康”“発育”“苦痛”“性格”の他、「こっちとこっちにいる」という2人の“位置関係”を示すような意味付与をしている。この“位置関係”は、以前の江藤らの母子相互作用¹⁻⁴⁾のモデルにはなく、このケース特有のものとして考えられる。

表 8 胎児のシグナル・反応行動に対する母親の意味付与

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	家庭	病院
存 在	存在	存在	＊	
		位置関係		＊
健 康	生存	生存		
	健康	健康		＊
	発育	発育		＊
状 態	活動	活動レベル		
		動作の様子		
	精神の安定度	驚き		
		安定		
	欲求の充足度	空腹		
		苦痛		＊
		満足		
伝 達	挨拶する	挨拶する		
	知らせる	知らせる		
	求める	訴える		
		要求する		
	理解・了解する	理解・了解する		
特 質	性別	性別		
	性格	性格		＊
	好み	好み		
	生活リズム	生活リズム		

2. 単胎と双胎での母子相互作用の比較

(1) 母子相互作用の開始

ケースは双胎妊娠をすぐには受容できておらず、「お腹に話し掛けるようなこともなかった」と述べており、その頃は胎児を相互作用の対象として、認識していなかったと考えられる。しかし、時間が経つにつれ、超音波の画面で2人が動いているのを見たり、周囲の人達の言葉で妊娠を受け入れるようになってきてから、胎児への働きかけが始まっているため、妊娠が受容できた段階で初めて胎児の存在が意識化され、相互作用が開始したと考えられる。この母子相互作用の開始については単胎でも双胎でも違いはない。

(2) 胎児のシグナル・反応行動

ケースは超音波診断で2人いることや、入院中毎日行うNST時に2人の児心音聴取部位

から、どの位置に胎児がいるのか分かったと言っていた。これらの医療行為がケースの五感を通して胎児からの行動として受け取られ、胎児の“存在”や2人の“位置関係”という意味を与え、再認識している。双胎妊婦にとってこれらの医療行為は胎児の位置関係を知る上で重要なシグナル・反応行動である。

(3) 胎児のシグナル・反応行動に対する母親の意味付与

ケースは胎児が成長するにつれ、お腹に2人いるのは狭く、苦痛であるという意味付与をしている。また、2人の胎動の頻度等から

「ちっちゃいから、よく動くのかな。片方は、大きくて狭いから、あまり動けないのかな」とか、よく動く方の胎児に対して「活発な子、やんちゃ」、あまり動かない方の胎児に対して「おっとりしている」など2人の発育の差や、性格の違いに関して意味付与している。

VII 考 察

1. 本事例の母子相互作用の特徴

以上の結果から、双胎妊婦の本事例に関する特徴について述べる。

(1) 周囲に誰もいないこと

ケースは“周囲に誰もいないこと”という条件のもとで、胎児に話し掛けるというシグナル・反応行動をとっている。これは、家庭でも病院でも見られる条件であり、この事例の特徴と言える。しかし、家庭にいる場合では、周囲に誰もいない状況は作られやすいが、病院に入院すると、プライバシーが保たれる空間も少なく、羞恥心や気兼ねが生じて、胎児に話し掛けるという行動が促進されにくい。

(2) 日常生活場面の変わり目

家庭では“日常生活場面の変わり目”の前状況により、行動を起こしている。これは母親自身が、日常生活の行動を変化させるときである。しかし、入院中の生活では安静を強いられ、ほとんどベッド上で寝たままであり、家庭での家事や育児に追われた生活に比べると、生活の節目が感じられにくい。そのため入院中ではこの前状況がないといえる。

以上のように、家庭と入院中では、物理的な空間の差や、生活行動の変化によって、母子相互作用が変化している。このケースでは、経産婦で、家庭では育児や家事に追われており、入院することで胎児への関心が向けられ、相互作用が促される場合もあるが、入院中の環境の変化は、母子相互作用の内容を制限しているとも考えられる。

(3) 客観的に見える行動と見えない行動

入院中では、先に述べたような周囲に誰もいない状況が作られにくい、母親のシグナル・反応行動の種類が少ないわけではない。入院中には“心の中で話し掛ける”“お腹をなで

る”というシグナル・反応行動をとっている。これは、自分の周囲に誰かいても、その人には胎児に対してとっている行動とは分かりにくいものであるために、入院中でも行動されていたと考えられる。つまり、周囲に誰もいないと、言葉で話し掛けたり、本を読んだりするような、客観的に胎児へのシグナル・反応行動とわかる行動はできるが、病院のように、誰かいる場合には客観的には見えない行動によって、胎児にシグナルを送っている。このことは、入院環境は母子の相互作用に影響を与えていると考えられる。

(4) ‘求める’伝達内容

このケースの伝達内容では、入院中に‘求める’という項目が多く見られる。家庭でいるときから、「えいこに育ってね、丈夫で生まれてよ」とか「頑張っておらんといかんで」など“願望する”“励ます”という伝達内容が見られたが、病院ではこれに加えて「元気に動かんといかんで」と“要求する”項目もあった。これは入院による精神的、身体的な苦痛が大きい中で、胎児の成長や、元気であると確認できることが心の支えとなっているためではないだろうか。このケースは双胎ということで、胎児に対する発育や、奇形の有無、2人同じように元気かどうかなど、2人の胎児に対する不安がつきることがなく、また、自分の力ではどうしようもないため、胎児に求める伝達内容が中心になると考えられる。

(5) ME機器を介した胎児のシグナル・反応行動

このケースは、妊娠初期に超音波の画面を見て「手足をばたばたさせて、2人動いているのを見て、やっぱり2人いるんだなって」と述べており、母親が2人の存在を知るのに、超音波の画面がとても重要になっている。さらに、妊娠週数が進んでからも、超音波の画面を見て、胎児の成長を確認するだけでなく、自分のどの位置に胎児がいるのかという2人の胎児の位置づけもしている。また、毎日行われるNSTではドップラーによる胎児心音の聴取部位によっても、胎児の位置関係を知る機会にもなっている。胎児の行動と捉えられる項目は、胎児自身の行動である胎動、つわり、出血など母親自身の身体に現れる徴候などがあったが、超音波断層法やドップラーなどのME機器を介しても、胎児からの行動となりうると考えられる。そして、これらのME機器を介した行動は、その時点で胎児が元気であるなど、即時的な行動ともなるし、前回見た画面、心音の部位などと比較して、成長の度合いや位置の違いという胎児からのシグナルとなる長期的な行動ともなると考えられる。

(6) 位置関係

先に述べたように、母親はME機器を介して2人の胎児がどの位置にいるのかという意味を与え、それをもとに、胎動があったときには、どちらの児が動いているのかがはっきり分かるようになっていく。そしてこの2人の位置関係を知ることで、さらには胎児それぞれの特性についての意味付与をしたり、個別的に異なったシグナル・反応行動を起こしたりして

いる。よって、位置関係の意味付与は双胎妊婦に特徴的なことであり、この意味付与によって、母親と1人1人の胎児との関係が形成されていくと考えられる。

VIII ま と め

今回、双胎妊婦が妊娠中にどのような母子相互作用を行っているのか検討した。その結果、このケースでは、入院生活をしていることにより、家庭とは異なる点があった。また双胎であることにより、胎児に求めることが多かったり、医療の介入が母子相互作用の重要な位置を占めていた。今後はさらに事例を増やして検討していきたい。

引用文献

- 1) 尾崎暢希他：妊娠期における母子相互作用第1報 — 母親からの胎児に対するシグナル・反応行動 — ，第33回日本母性衛生学会学術集会抄録集，p 107，1992
- 2) 江藤真由美他：妊娠期における母子相互作用 第2報 — 母親から見た胎児の母親に対するシグナル・反応行動 — ，第18回高知女子大学看護学会集録，p 22 - 28，1992
- 3) 菊地恵子他：妊娠期における母子相互作用 第3報 — 胎児のシグナル・反応行動に対する母親の意味付与 — ，第34回日本母性衛生学会学術集会抄録集，p 228，1993
- 4) 菊地恵子他：妊娠期における母子相互作用 第4報 — 妊娠期における母子相互作用モデル — ，第34回日本母性衛生学会学術集会抄録集，p 228，1993

参考文献

- 1) 新道幸恵，和田サヨ子：母性の心理社会的側面と看護ケア，医学書院，1990
- 2) 長南記志子：切迫流早産で長期入院している妊婦のケア，ペリネイタルケア，13，増刊号，p 104 - 109，1994
- 3) 三井政子他：双胎出産をめぐる生活上の諸問題，母性衛生，29(1)，p 98 - 104，1988
- 4) 庄司順一：妊産婦の心理および胎児の行動と，母児へのサポート，教育と医学，41(11)，p 1009 - 1015，1993